

スクール設立に至った経緯

1. 大きく変わる世界

- 30年後の世界は、「テクノロジー（AI等）」「グローバル化」「少子化」等の影響で多様性が増し、変化のスピードが速くなるであろうことが予測されています。
- 不確実さが増していくと言えるわけですが、これを自由でワクワクする時代としてユーモアをもって楽しむには「自己肯定感」「協働する力」「一歩踏み出す勇気」など、従来のお勉強から得られるものとは異なる資質・スキルが一層必要になってくるでしょう。
- 世界の常識もどんどん更新されるでしょうから、一生「学び続ける意欲・力」も大切になってきます。
- 世界中が新たな時代に対応した教育システムを構築しようとしています。アジアではトップダウンでのエリート教育が進められ、アメリカでは世界をリードする大学・大学院があり、欧州では市民参画型で多様な学び方が開発されています。

2. 選択肢の少ない日本の教育環境

- 日本は古来教育熱が高く、戦後の教育は経済的に豊かな社会、知性やモラルを持つ人の育成に貢献してきました。一方で、学校には「号令で人を動かす文化」なども残り、現代人に必要な「自立と教養」をサポートする場とは言い難い環境が固定化しています。
- 日本が経済だけの繁栄を超えて真に豊かな社会になるには、多様な人が自分らしさを大切にしながら生きていきやすいよう選択肢がたくさん存在することが大切だと思います。
- 教育においても、学び方の選択肢があることが望まれます。実際「教育機会確保法」という不登校児の権利を保障する素晴らしい法律が官民の協働により成立しました。これからの時代、選択肢は（官から降ってくるのを待つだけではなく）一人ひとりが参加・協力をして作っていく時代になってきています。

3. 子どもが育つ環境への危機感

- 幼い子を観察していると、環境（主に周りの人や自然）から多くのことを体験として吸収していることがわかります。ある意味、学校の勉強は体験から得た感情・観察を文字・数字に置き換える行為とも言えます。つまり学びは、体験があって成立するものなのです。
- 長い人類の歴史で子どもが多くの体験を得てきた近所づきあいや自然は、都市化の流れの中で激減しています。それは、幼い頃に本来しておくべき体験の幅や厚みが奪われているとも言えます。
- 効率性や経済性など「大人の事情」が若い世代にまで下りてきているのも気になる点です。人類は、長い進化の過程で未熟な子ども時代をどんどん長くしながら生き残ってきた生物です。
- 長い子ども時代は、遊んで、食べて、笑って、泣いて、ぼーっとして、寝る、つまり「非効率に生きることが本質」だったはずですが、幼い頃から仕事に追われている大人のような過ごし方をすれば、好奇心や意欲は摩耗してしまいかねません。

4. 都会にこそ「理想的な育ちの場」が必要では？

- 私たちは、子どもには生まれながらにして「自ら成長する力」が備わっていると信じています。そして、その力が存分に育つためにはバランスの取れた「場」や「機会」が必要です。
 - ① 人と自然にたっぷりふれあい、自分らしさを大切にしながら満足した子ども時代を過ごす（→Confidence）
 - ② 多様性を尊重し、人と協働する体験をたくさんする。二ヶ国語で学び、世界は広いことを肌で感じる（→Collaboration）
 - ③ 都会ならではの先進的な学びに触れつつ、知識で終わらず「一歩踏み出す（つくる／表現する）」経験をたくさんする（→Creative Innovation）
- 都会にこそ必要、都会だからこそ可能、そんな「新たな学び方の選択肢」を提案し、目の前の子どもの育ちを、保護者の皆さんと共により豊かなものにしたいと考え、設立を発案するものです。